



佐々木 武 人

ささき たけと

新14回生

昭和18年、盛岡市生まれ。東京学芸大学卒。東京教育大学大学院に進み、柔道を運動生理学的視点から研究。昭和48年、同大学院修士課程を修了し、福島大学に赴任。講師、助教授を経て、教育学部保健体育科教授。昭和62年、医学博士（福島県立医大）。大学での研究・指導のかたわら、海外での柔道指導にもあたっている。

「同じ柔道でもそれぞれの国にお国柄がみられる」

国際化したJUDOを 科学の眼で斬る

いまはもうなくなってしまうが、岩手公園の一角に「武徳殿」という名の小さな武道場があった。盛岡に育ったある年代以上の人には、とくに子供のころ柔道や剣道に親しんだ経験をもつ人にとっては、名前を聞くだけで在りし日の古めかしい姿がちどころに思い浮かぶ懐かしい建物である。

小学五年生の佐々木武人少年が初めて本格的な柔道の手ほどきを受けたのも、武徳殿で開かれていた柔道教室のことだった。柔道そのものの魅力もさることながら、指導してくれた先生たちの人格から滲み出る雰囲気は

強く印象づけられた。柔道指導者への憧れはこのころ芽生えたのかもしれないし、やがて実際に自分がその道を歩みはじめてからも、彼らの姿を指導者の理想として追いつづけてきたところがある。

岩手中学に入学した佐々木さんは、迷わず柔道部の門を叩いた。中学・高校を通じて六年間の激しい稽古の日々。部員のなかでも小柄なほうだった佐々木さんは、技量の上達すればするほど、柔よく剛を制す。柔道の醍醐味に引かれていった。柔道を自分の一生の道に、とはつきり意識しはじめたのは、高校一

年のころだったろうか。佐々木さんのみならず、部員全員がめきめきと腕を上げ、毎日の練習にも活気があった。当時の岩高柔道部は県でもトップレベルの活躍を示し、後につづく黄金時代の礎を築いている。ライバル盛岡一高の好敵手たちも含め、高校時代の柔道仲間との温かい交流はいまも続く。

教員養成大学である東京学芸大学に進学。もちろん柔道部に所属し、四年生では主将も務めた。卒業後は岩手に帰って高校の体育教師として柔道の指導にあたるのが希望だったが、教員採用試験のため帰郷していたとき、病いに倒れた。肋膜炎で半年の入院。この思わぬ挫折が転機となった。

「それまで若い体力にまかせてがむしゃらに突っ走ってきただけに、半年の入院はいろいろなことをじっくり考えさせられる機会となりました。とくにわれわれ体育系の学生は

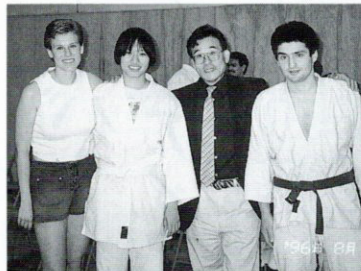


緑豊かな恵まれた環境のキャンパスが職場



世界のJUDO仲間と共に汗を流す

平成8年8月



平成6年11月



平成6年12月

四年間をほとんど実技に専念して、本を読む時間も失っていた。これじゃいかんな、もっと勉強したいな、と静養をかねて、大学を一年留年。その間に体育学の専門書を読みあさり、柔道の運動生理学的見地からの研究というテーマに行き着いた。受験勉強をしなごして、柔道指導者の養成では日本でも指折りの東京教育大学大学院の入学に合格、柔道研究室に所属した。

ここでのテーマは、発育段階の柔道指導における運動生理学的な研究。かみくだいて言うとうと、子供に柔道を指導する場合、何歳の子供にはどんな量と強度の運動で指導すればいいか、あるいはどんな技を何歳から教えられるのか、その理論体系を、柔道の技によって体が受ける衝撃が子供の年齢によってどう違うか、また技の種類によってその衝撃がどう違ってくるかなどの科学的データに基づいて明らかにする研究であり、当時の柔道界では未開拓の分野だった。

大学院での研究の道もけっして平坦ではなかった。ふたたび体調をくずしたこともあり、二年間の修士課程を三年かけて修了、福島大学に講師として赴任。以来、一貫して発育期の柔道指導に先導的な研究を積み重ねてきた。「柔道の指導法はややもすれば経験則に依存してきた面がある。もちろんそれは長い伝統のなかで培われてきた経験則なのですが、私の仕事はその経験則に科学的・理論的な裏付け、言いかえれば客観的法則性を与えて、さらによい指導法に発展させていこうとする試みであると言っているでしょう」

研究のかたわら、昭和六二年には全日本大学柔道連盟海外遠征チームのコーチとしてフィリピンを訪れ、同国のナショナルチームを技術指導。平成五年には、国際的に発展した柔道を学術的視点より検討して『現代柔道論——柔道の国際化を考える』（大修館書店）を著し、日本経済新聞の読書欄などでも高く評価された。また平成六年には文部省長期在外研究員としてアメリカ・ウイスコンシン大学に一〇カ月間滞在し、同大学の柔道クラブや街の柔道クラブで指導するとともに、ヨーロッパにも足をのぼしてイギリス、フランス、ドイツ、フィンランドなど八カ国の大学や研究所を歴訪している。

「国際化した柔道が、それぞれの国でオリンピックに象徴されるようなあくまで勝利を追求するスポーツ競技として研究・強化されるいっぽうで、柔道のもつ精神的な面に強い魅力を感じて愛好している人々もまた多いことに意を強くしました」

岩中・岩高の後輩へのメッセージを、佐々木さんは次のように送ってくれた。「好きなことを見つけてほしい。いまは選択肢が多すぎて何を選んだらいいのか難しい時代なのかもしれませんが、夢中になれるものを見つけてほしい。そして当たって砕けるの精神でぶつかってほしいですね。当たって砕けたら、砕けてからもう一度考えればいいじゃない。多少の回り道なんか気にしないで……」

みずからの体験に裏打ちされた、説得力ある言葉だ。

(和田 雄司)